

## ティーチング・ポートフォリオ

菱田 信彦

(記入日：2023年2月27日)

### 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

科目名	年次	期間	必・選	単位
国際コミュニケーション (イギリス研修)	1	集中	選択	2
総合講座 (3) (コーディネーター)	1	後期	選必	2
MANGA と anime	2	後期	選択	2
基礎ゼミナール (Aクラス)	1	前期	必修	1
コミュニケーション基礎演習 (Aクラス)	2	前期	必修	1
イギリス文化史 (1)	1	前期	選必	2
イギリス文化史 (2)	1	後期	選必	2
英語文学演習	2	後期	選必	2
インターナショナル・プログラム (1)	1	後期	選必	2
リサーチ&プレゼンテーション	3	前期	選必	2
セミナー	3	通年	必修	4
卒業研究	4	通年	必修	6

※2022年度は履修者がなかったが、大学院科目も担当

### 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標は、社会にはそれぞれの人の立場、背負っている文化的・歴史的背景によってさまざまな価値観やものの見方・考え方が存在することを学生が理解し、相手の立場や価値観に配慮した柔軟で効果的なコミュニケーションを取れるようになること、さらにその理解をふまえて実社会の問題を調査・分析し、自分の立場を明確にした上でその問題について提言を行えるようになることである。

### 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

学生がイギリスのオックスフォードで3週間の語学研修を行う「国際コミュニケーション (イギリス研修)」では、イギリス人の文化や価値観が日本人とどのように異なるかを意識させた上で、オックスフォードに関するリサーチとプ

プレゼンテーションをさせた。帰国後には日本人と他国人との文化的違いなどをテーマに英語でスピーチを行わせ、一部の学生は鶴雅祭の英語スピーチコンテストにも出場した。「MANGA と anime」では、日本の漫画・アニメ作品を分析した海外研究者の論文やその和訳を講読させ、また日本の作品とその英訳版を比較させることにより、漫画・アニメを通して見えてくる日本と海外の文化や感覚の違いに注目させた。さらにそれらをふまえて学生に日本の漫画・アニメのセリフやオノマトペを英訳させた。

「基礎ゼミナール」と「国際コミュニケーション」では、資料の収集や分析、プレゼンテーションなど大学での研究活動の基礎を身につけさせるとともに、自分の立場を明確にした上で意見を述べ、他の意見に対して質問やコメントを行う、ということを経験させるよう努めた。またプレゼンテーションを「評価シート」により相互評価させることで、効果的なプレゼンテーションとは何かということへの意識を高めた。「英語文学演習」ではイギリス、カナダ、アメリカなど英語圏諸国のよく知られた児童文学作品を、それらが書かれた時代の文化的・社会的背景をふまえて読解することにより、作品がその時代のジェンダー、階級、民族などの問題をいかに反映しているかに目を向けた。「リサーチ&プレゼンテーション」では、社会的問題について英語でリサーチとプレゼンテーションを行う際の基礎を身につけさせるとともに、問題に対する賛否や優劣の判断を明確に示そうとする英語圏の人々の価値観を意識させ、それをふまえた上で話し合いながら自分たちのプレゼンテーションを作成するグループワークを行い、さらにグループ間でプレゼンテーションの相互評価を行った。「セミナー」ではイギリスの児童文学作品に関する英語論文の一部を講読させ、作品の書かれた時代の社会背景がいかに作品に影響しているかをディスカッションした。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

大学での学修に欠かせないリサーチとプレゼンテーションの基礎を身につけ、また、さまざまな立場が存在することを意識しつつ自分の意見を発信することができるようにするという点では、ある程度の成果を挙げたと考えている。とくに「コミュニケーション基礎演習」の評価シートでは、学生が他のメンバーのプレゼンテーションを意識的に聞き、身振りやアイコンタクトなどのデリバリースキル、またプレゼンテーションの論理構成や説得力について客観的に評

働いていることがうかがえた [エビデンス 1]。また「MANGA と anime」で学生が提出した課題やコメントシートには、言語の違いがものの見方や考え方に決定的な違いをもたらすことに対する学生の理解が示されている [エビデンス 2]。さらに「リサーチ&プレゼンテーション」で学生が作成したプレゼン原稿、また相互評価シートには、意見を述べるために自分の立場を明らかにするとは具体的に何をすることなのか、ということをめぐる彼女らが苦闘した経緯が見てとれる [エビデンス 3]。

その一方、時間的制約もあって教員がテーマを提示して課題にとり組ませることが主だったため、学生が自分の関心にもとづき主体的に問題を発見してテーマ化する活動にまで至れていないという思いが残る。グループワークの運営なども学生中心で行わせたかった。

## 5 今後の目標（これからどうするか）

学生の問題意識と主体性をより高める活動が必要になる。「リサーチ&プレゼンテーション」のようなアクティブな学びを中心とする科目では、教員の働きかけは環境づくりにとどめ、テーマの設定やグループワークの進行を学生自身で運営するような形が望ましい。また教材についても、これまではプリントやパワーポイント資料の形で授業中に提示していたが、クラウドに保存するなどして学生が授業時間外に自由に閲覧できるようにし、より多くの授業時間を学生の主体的な活動にあてられるようにしたい。

## 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 「コミュニケーション基礎演習」評価シート（非公開）
- 2 「MANA と anime」提出された課題およびコメントシート（非公開）
- 3 「リサーチ&プレゼンテーション」英語プレゼンテーション原稿および相互評価シート（非公開）

(記入日：2023年2月28日)

**1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)**

科目名	年次	前後期	選・必	単位
英検特別講座(3)	1	前	選	2
英語 I(1) (再履修クラス)	2	前	必	1
英語 I(2) (再履修クラス)	2	後	必	1
英語 II(1)	2	前	必	1
英語 II(2)	2	後	必	1
リーディング III	3	前	選	2
ライティング III	3	後	選	2
国際文化特講 I	3	後	選	2
インターナショナルプログラム(2)	2	前	選	2
英語科教育法 III	3	前	選	2
英語科教育法 IV	3	後	選	2
卒業研究	4	通年	必	6
ニュージーランド研修 (我孫子キャンパス)	2-3	後	選	2
ニュージーランド研修 (目白キャンパス)	2-3	後	選	2

**2 理念 (なぜやっているか：教育目標)**

私の教育目標は、英語および英語圏文学・文化の学修を通じて、日本以外の地域の社会や文化についての理解を深めることである。英語の学びを積み重ねることで英語で展開されるメディアに触れることが可能となり、英語圏文学・文化の学びを得ることで、英語圏に属する国や地域の歴史や社会背景を理解できるようになる。こうした学びから、日本とは異なる価値観を知り、さらに、より多様な価値観を想像できるような気づきを提示することが、私の目標である。

以下に「英語 I(1)(2)」「英語 II(1)(2)」「ライティング III」「国際文化特講 I」の目的についても述べる。

・「英語 I(1)(2)」「英語 II(1)(2)」は前述の6学科(史学科、心理学科、日本文化学科、幼児教育学科、児童教育学科、生活文化学科)の1, 2年生の必修科目であり、単位取得が卒業要件となっている。したがって、大学学部レベルの総合的な英語学修が求められる。高校レベルのコミュニケーション力、文法事項確認に加えて、学部レベルの文法の知識および

読解力の習得を目的とする。

・「ライティング III」は国際英語学科の3年生以上を対象とした選択必修科目であり、英語によるアカデミック・ライティングを修得する科目である。学部レベルでの論理的な思考力および分析力が求められ、5段落構成による論理的なエッセイ・ライティングの習得を目標とする。とりわけ、**magic 3**と呼ばれる、自分の主張を3つのポイントに絞って論を展開する手法を第I段落の最後に組み込めることを目的とする。

・「国際文化特講 I」は国際英語学科の3年生以上を対象とした選択必修科目であり、副題として「(イギリスと文化)」が掲げられている。18世紀から20世紀におけるイギリスの食べ物、飲み物について様々なテキストや画像、映像を用いて分析していく。当該世紀におけるイギリスの立ち位置、文化、社会的背景について学部レベルの知識、分析力を身につけることを目的とする。同時に、グループワークを通じて学生自身のリサーチスキルを向上させること、グループにおける独創的な着眼点を見つけること、意見調整ができることについても目的とする。

### 3 方法

「英語 I(1)(2)」、「英語 II(1)(2)」、「ライティング III」、「国際文化特講 I」の4科目に共通して実践しているのは、学生の回答や質問、疑問に丁寧に答え、フィードバックを行う点である。授業中に適宜、学生の理解の度合いを確認し、学生たちの足並みをそろえるよう心掛けた。以下に詳細を述べる。

#### ・「英語 I(1)(2)」

「英語 I(1)(2)」では、英語におけるコミュニケーション能力の向上を目標とした。授業中にはできる限りペアワークを取り入れ、テキストを元としたサンプル・カンパセーションを各学生がアレンジして話すようにした。その際、アレンジの例として様々なシチュエーションを想定した表現の例をプリントとして配布して学生の意欲を刺激した。

#### ・「英語 II(1)(2)」

「英語 II(1)(2)」では、時間が許す限り、テキストの内容に関連する文法事項や文化的背景について、丁寧な板書や授業用ファイル（授業前に **teams** でファイルを掲示・授業時には紙媒体のプリントとして希望者に配布）を活用して、学生の理解を補強した。同時に教室内の机間巡視で学生からの疑問に答え、授業内容について行けるように常時支援した。また、授業後は **teams** のチャットによる質問や感想を毎回受け付けて、学生の感想や疑問点について教員からこまめにコメントや回答を送信するようにした。

#### ・「ライティング III」

「ライティング III」では、**5-Paragraph-Essay** の組み立ておよび展開方法について、指定テキストの内容をもとに適宜教員が説明を追加し、わかりやすく表現に換えて指導した。今年度は、学生全員が **Process** パターンを用いた論理的な構成に到達できるように授業を展

開した。第一段落となる **Introduction** ではトピックの提示に加え、最終文に **Thesis Statement** を配して、**magic 3** と呼ばれる要点の明記については最重要視し、繰り返し指導した。日本語による小論文の「起承転結」型の組み立て方から脱却し、**Introduction, Body 1, Body 2, Body 3, Conclusion** の5段落構成による論理的な文章構成力の習得を常に意識して英文を構成するよう指導した。また、机間巡視中に学生一人一人の英文を確認することで、後の大きな躓きにつながらないように、これを実践できるように常時配慮した。

①授業では、指定されたテキストの該当部分を指定して学生に読ませ、内容を教員がまとめたのちに、テキストに従って各自が板書された課題に取り組み提出する、という形式をとった。習熟度は学生によって全く異なるため、授業中に各自課題に取り組みながら、疑問点があれば教員に個別に聞くよう促した。質問をしない傾向が強い学生については、机間巡視中に適宜声がけし、学生間の理解のずれをこまめに埋めるよう心がけた。授業内に提出する課題も高頻度で掲示し、集中して取り組ませた。

②予習内容は授業の最後に必ず提示した。復習が必要とされる学習内容については、テキストを復習する際に、当該ポイントが記載された箇所を提示し、学生各自の振り返りを促した。

#### ・「国際文化特講 I」

「国際文化特講 I」では、イギリスの作家、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』およびベアトリクス・ポターの「ピーター・ラビットシリーズ」の「パイがふたつあったおはなし」を英文で講読した。授業中、学生を指名して英文を読ませ、教員がその内容にコメントしつつ、作品中に登場する食べ物や飲み物と当該英文との関連に触れ、当時の社会的背景（とそのギャップ）を読み解いた。

授業の方法は一律ではなく、以下の3つのパターンを組み合わせ実施した。

- (1) **Power Point** による作品説明、社会的背景の説明\*
- (2) 教員が提示したトピックについてグループワーク (2~3人)
- (3) テキストの購読 (学生を指名して英文を音読し、その概要を述べる)

\***PowerPoint** 資料は、授業終了後に期間限定で当該 **team** に掲示し、学生の振り返りを促した。

なお、授業の終盤に、当該授業内容に関するリアクション・ペーパーを書かせることで、学修内容の振り返りを心がけた。また、同リアクション・ペーパーには感想・質問も書かせ、次回以降の授業で丁寧な回答やコメントを付して返却し、学生の学ぶ意欲を刺激する一助とした。早めの回答が望ましい場合は、**teams** のチャットを通じて学生に返信した。

学生には次回の予習事項を提示して準備を促した。また、より深い学びを求める学生のために、**teams** 上に補足資料を画像ファイルとして掲示し、自発的な学びを後押しした。

## 4 成果（どうだったか：結果と成果）

### ・「英語 I(1)(2)」

英語でのコミュニケーション能力の向上という点では、再履修クラスではあったものの、ペアワークに楽しく取り組めたことは学期末のアンケートでも記述があり、一定の成果だったと考えられる（エビデンス 1）。

・「英語 II(1)(2)」

Unit 毎に補助プリント(補助ファイル)を用意したことは、学生の予習意欲、学習意欲を維持するためかなりの効果があったと考えられる。学期末のアンケートにおいても、「補助プリントが予習・復習に役立った」「補助プリントのおかげで授業内発表時にも極度に緊張することなく和訳を述べる事ができた」というコメントを多く得た（エビデンス 2）。また、「英語の長文を読む際に構成に注意しながら読むようにしようと思った」「英語圏の文化についても触れることができて興味深かった」という感想を複数得た（エビデンス 2）。「英語 II」の到達目標に近づけることができたのではないかと考えられる。

・「ライティング III」

学期末試験では、Introduction の最後に magic 3 を含めた Thesis Statement を配する、という目標をほとんどの学生が達成していることが確認できた（エビデンス 3）。総合的に見ても、論理的な 5-Paragraph-Essay の作成能力の習得が認められた（エビデンス 3）。また、授業で取り上げた Punctuation については、それまで掘り下げることの少ない内容であったため、この科目で緻密に確認することができてありがたかった、卒業研究の資料提示でも役立てたい、といった意見を得た（エビデンス 3）。

・「国際文化特講 I」

イギリス文学・文化における食べ物・飲み物について論理的に説明する、という点については、毎授業でのリアクション・ペーパーで論述させたことで、半数以上の学生の理解が定着したことは読み取れた（エビデンス 4）。この点は大きな成果であると言える。また、グループワークを取り入れたことで、自分とは異なるリサーチ方法・知識に触れ、各グループのリサーチ内容が深まった（エビデンス 4）。グループワーク後にいくつかのグループを指名してリサーチ内容を発表させた点でも、多様な、または独創的なリサーチ内容を全体で共有でき、有意義であったとの感想の複数得た（エビデンス 4）。具体的な意見としては、授業を通じて当該世紀における女性の立ち位置の厳しさについて、認識をあらたにした、というものがあつた（エビデンス 4）。授業内で鑑賞した映画『ミス・ポター』についても、「国際文化特講 I」での学修内容を踏まえて鑑賞することでより深い理解につながった、という意見が複数見られた（エビデンス 4）。授業評価アンケートでは、『不思議の国のアリス』を見る目が以前とは全く変わり、イギリス=大英帝国であることがよく理解できた、とのコメントを得た（エビデンス 4）。

## 5 今後の目標（これからどうするか）

対話型 AI が台頭するこの時代において、自力で取り組もうという、学生の学習意欲を維

持しつつ、学びを楽しみと感じられる工夫をしていくことが、さらに重要になっていくと思われる。「国際文化特講 I」のような、学生同士のアクティビティを取り入れた科目では、AI に議論を丸投げすることを防ぎつつ、論理的な道筋の研究が自分たちでできるように、教員が机間巡視し、適宜、声掛けすることが必要になるだろう。「英語 I」「英語 II」のような従来の語学科目においても、学生の自発的な学びに向けた方向づけは極めて重要視されるため、教員側からの掘り下げた質問やコメントが求められるだろう。「ライティング III」においては対話型 AI の弊害が最も深刻になると予想される。自力で考えることの重要性について、課題を提示するたびに必ず伝え、学生の主体的な学びを積み重ねる場にしたと考える。

## 6 エビデンス (資料の種類などの名称)

- 1 「英語 I(1)(2)」課題、学期末試験のコメント欄 (非公開)
- 2 「英語 II(1)(2)」課題、teams のチャット内容、学期末試験のコメント欄、授業評価アンケート (非公開)
- 3 「ライティング III」課題 (非公開)
- 4 「国際文化特講 I」リアクション・ペーパー、課題、学期末試験のコメント欄、授業評価アンケート (非公開)



## ティーチング・ポートフォリオ

国際英語学科 倉林 直子

(記入日：2022年 9月1日)

### 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

(2022年度 前期)

アメリカ文化史(1) (1年次以上：選択必修2単位)、国際関係入門(1) (1年次以上：選択必修2単位)、国際文化演習(2) (2年次以上：選択必修2単位) など

### 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

アメリカをはじめとする他国に関する知識をさまざまな角度から伝えることによって、学生の目を世界に向けさせるとともに、教養を深め、異文化理解の楽しさや難しさを認識させることを目標としている。

### 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

2022年度前期はすべて対面で授業を行うことができ、(著作権上なかなかオンラインにのせることができない画像や映像を含め) パワーポイントや映像資料を効果的に活用できたと思う (エビデンス1)。さらに、新聞記事やインターネット資料を使い、学生の関心を現在の国際情勢に向けるよう試みた。

アメリカ文化史(1) はアメリカの歴史を植民地時代から南北戦争までたどる授業だが、歴史的事実を説明するだけにとどまらず、時に新聞記事やインターネットの映像等を活用し、過去を知ることによって現在を理解できるということを示した。例えば、アメリカの人種問題、また、銃問題などは授業内容と関連付けて説明すると、学生が関心を持って聞いてくれていたと思う。

国際関係入門(1) は、ちょうどロシアのウクライナ侵攻が起こった時期に、この出来事背景を詳しく説明した。シラバスの内容を一部変更することになったが、学生の関心は非常に高く、熱心に講義を聴く様子が見られた。また、後半には各学生が関心のあるニュースを調べ、それを発表し、他の学生と共有した (エビデンス2)。それぞれの発表後に簡単なディスカッションを行うことで、さまざまなニュースに対する問題意識が高まったと思う。

国際文化演習(2) は大統領のスピーチを訳すことで英語力を高めることが目的の授業であるが、大統領のスピーチする姿を映像で見せることで、効果的なスピーチとはどういうものなのかを学生に考えさせた (エビデンス3)。今年度は、戦後の大統領、

特にオバマ、トランプ、バイデンという現代の大統領のスピーチを扱い、現代アメリカを理解するための政治的また文化的背景を詳しく説明した。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

アメリカ文化史（1）と国際関係入門（1）、どの学生も非常に熱心に講義を受けていたが、中間の論述試験で理解度に差が出ていることが顕著になった（エビデンス 4）。それぞれ試験にコメントをつけ、返却し、さらに全体に対してもフィードバックを行ったため、期末の論述試験はよりよくなった学生が多かった。

国際文化演習（2）では、授業中は学生に訳させ、文法事項を教員が説明するという形をとったが、中間試験の結果が全体的によくなかった。期末試験も授業をきちんと聞いている学生とそうでない学生の間で顕著な点数の差が出た。

授業評価アンケートにおいては、視聴覚資料を含む教材の使用が適切かという質問に対し、9割（アメリカ文化史 100%、国際関係入門 92%、国際文化演習 89%）の学生が、「そう思う」あるいは「どちらかというと思う」と答えている。さらに、自由記述欄では現代と過去両方を学べることを評価するコメントが複数あった（エビデンス 5）。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

国際文化演習以外は講義形式の授業であるため、どうしても教員が話す時間が多くなるが、今年度はなるべく学生の反応に注目し、理解できていなさそうな部分は再度細かく説明するなど心がけた。しかし、授業評価アンケートでの理解度が高いにもかかわらず、それが試験に反映されていない学生も少なからずいたことから、レスポンスペーパーなどを利用して、学期中に学生の理解度をきちんと把握する必要があるのではないかと思う。国際文化演習（2）は訳読ができていても構造を理解していない学生が多いことが分かったので、ただ訳させるだけではなく、文法事項等細かいこともこちらから積極的に質問することによって、学生を主体的に関わらせる授業を心がけていきたい。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

エビデンス 1：授業内で使用するパワーポイント（非公開）

エビデンス 2：国際関係入門(1) 学生の提出物（非公開）

エビデンス 3：University of Virginia, Miller Center Homepage

エビデンス 4：アメリカ文化史（1）国際関係入門（1）中間、期末試験（非公開）

エビデンス 5：2022 年度前期授業評価アンケート（非公開）

## ティーチング・ポートフォリオ

国際英語学科 佐藤 翔馬

(記入日：2023年2月18日)

### 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

言語学演習(2) (2年次以上：選択必修2単位)、言語コミュニケーション特講Ⅱ (3年次以上：選択必修2単位) など

### 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

教師による一方的な講義だけではなく、問題演習、ペアワークやグループワーク、ディスカッションを取り入れることで、受講者に言語学や第二言語習得論に興味を持ってもらうとともに、なるべく身近に感じてもらうことを目標としている。

### 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

言語学演習(2)では言語学の下位分野の一つである統語論を扱った。ほとんどの受講者にとって統語論はまったく未知の学問であったため、パワーポイントを使用して詳細な説明を心がけた。また、ほぼ毎時間練習問題に取り組んでもらい、机間巡視を行った。練習問題は必ず回収し、受講者の理解度を確認したうえで返却した (エビデンス 1)。

言語コミュニケーション特講Ⅱでは第二言語習得論を扱った。第二言語習得論も多くの受講者にとって未知の学問であり、教職課程の履修者もほとんどいなかったため、個人課題やグループワーク、グループディスカッションを通して理論や仮説を自分の立場に置き換えて考えることで、第二言語習得論を少しでも身近に感じてもらえるよう努めた。また、個人課題だけでなくグループワークやグループディスカッションの結果も必ず紙面にまとめてもらったうえで回収し、講評しつつ返却した (エビデンス 2)。

また、上記 2 科目の授業ではどちらも講義資料としてパワーポイントを使用した。使用した資料はオンライン上にアップロードし、受講者が復習に使用できるようにした (エビデンス 3)。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

言語学演習(2)の授業評価アンケートでは、「授業が楽しい」「内容は難しいが丁寧に教えてくれる」といった意見が見られ、パワーポイントを使用した説明や問題演習には一定の効果があつたものと思われる（エビデンス 4）。また、オンライン上にアップロードした講義資料についても、実際に復習に使用しているという声が聞かれた。

言語コミュニケーション特講Ⅱの授業評価アンケートでは、「個人課題やグループワークに取り組むことで授業内容の復習ができてよい」という意見が見られ、こちらも効果があつたものと思われる（エビデンス 5）。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

詳細な説明を心がけたつもりではいたが、提出された課題を見てみると、まったく理解ができていないと思われる受講者もいた。個人課題やグループワークの最中には机間巡視を心がけていたものの不十分であり、すべての受講者に目が行き届いていなかったためにこのような結果になったと考えられる。今後はさらにわかりやすい説明を心がけるとともに、できる限り受講者一人一人の理解度を意識しながら授業を進めていきたい。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

エビデンス 1：言語学演習(2) 受講者の提出物（非公開）

エビデンス 2：言語コミュニケーション特講Ⅱ 受講者の提出物（非公開）

エビデンス 3：講義資料（非公開）

エビデンス 4：2022 年度後期授業評価アンケート（非公開）

エビデンス 5：2022 年度前期授業評価アンケート（非公開）

(記入日: 2023年2月16日)

### 1 教育の責任(何をやっているか:担当科目)

日本の政治と国際社会(1-4年前後期選択必修科目、2単位)、海外から見た日本(2-4年前期選択必修科目、2単位)、EIAIII(3-4年前後期必修科目、1単位)、国際文化演習3(2-4年後期選択必修科目、2単位)、国際文化特講V(2単位)、IELTSと英検の筆記と二次試験対策講座(1-4年、参加自由、単位なし)、TOEIC筆記試験対策講座(1-4年、参加自由、単位なし)、英会話(1-4年、参加自由、単位なし)。

### 2 理念(なぜやっているか:教育目標)

教育には何かを学ぶ、何かを教えるという場面が当然多いのだが、それは *cognitively passive study behaviour* を産んでしまいがちなアプローチであろう。社会に進出・活躍し、成功出来るのに何が必要かという、*metacognition* を生み出す *cognitively active study behaviour* ではなかろうか。*Metacognition* というのは、簡単な言葉で言えば、思考についての思考、学ぶ過程そのものから学ぶ。*Metacognitive* と *reflective pedagogy* の目的は人間を自主的な学習者として育てることである。こういう *pedagogy* の中核には「何を学ぶか?何を学んだか?」のではなく、「どうやって学べばいいか?」という学生達自身による自問自答である。自分で自分の学びの仕方を自覚、分析、そして管理する能力を培うことがポイントである。自分の学び方の自覚、分析、と管理過程を言語化し、そして共有が出来ることによって、今も将来も欠かせないピアラーニングのスキルも身に付くであろう。

### 3 方法(どのようにやっているか:実践の工夫)

EIAIIIの授業は学生達が最後に受ける英会話を中心とした必修科目である。目標は学生達の話す力がCEFR B2相当のレベルに達することである。2020年度から採用したテキスト *Impact* は学生達の *creativity, critical thinking, communication* と *collaboration* を基軸にした教材である。*Impact* は学生達の想像力、グループ内の役割分担、情報の処理能力、英語でのコミュニケーション力の発展を促している。ほとんどのアクティビティの場合は学生達がいくつかの違うやり方を求めている課題をまず理解し、話し合い、自分たちのグループ又はペアに合う課題又は挑戦してみたい課題を選べられる。B2のレベルで求められているのは馴染みあるテーマについても、自己の専門分野以外のテーマについても、話題が具体的でも抽象的でも、会話が出来ることである。

例えば、*colour* をテーマにした章では、a) *plan and create an art presentation*, b) *plan and make a presentation about colour and taste*, c) *write blog about colours in your community* という三つの課題を理解し、それぞれのやり方を話し合い、その中から一つを選び、課題に取り組むことが求められる。ペアで課題を終えた後で、隣のペア又はクラス全体で意見交換が出来る場を設ける。具体例を挙げると、課題a)を選んだペアがオーストラリアのアボリジニの芸術を参考にし、日本の風景を描き、そのテクニックなどについて語るペアもいた；b)の課題を選んだ学生達が青いカレーを食べた経験などについて語った。

数多くの課題がクリエイティビティや楽しさを軸にしている。社会問題のテーマの章ではフードロスについての複雑な文章の主旨を理解した後に、フードロスになりそうな食材を使ったレシピブックを作るアクティビティも提示される。又は、食材を漫画のキャラクターにし、それらがゴミ箱に捨てられた後の会話を作らせる課題も選べられる。課題に取り組むのに必要な方法、アウトプットはさまざまであり、学生達の個性を尊重する教材と授業の進み方だと思う。難しいと思われる課題についても、グループやペアで取り組むと、英語で話し合う力が伸びると学生達が証言している。(エビデンス①)

EIAIII の講師の役割は学生達の言語活動を支援することである。ファシリテーターとしては、ペアの英語のレベルに応じて、課題へのアプローチについて助言したり、行き詰まった学生達に問答法を通しやり方を見つけさせたり、レベルに応じ見えそうな表現や構文を教えたり又は思いださせたりする。(エビデンス②)

MS Teams を使う場面が少なくなったのだが、筆記課題に使う時もある。例えば、文章を書かせた時にそれらをチャンネルに載せさせる。そして、学生達がお互いの文章を理解し、コメントを書く。その後、講師としては、共通している誤用例を提示し、会話や問答法を通し誤用例の認識を促し、表現の正確さの大切さを再認識させる。(エビデンス③)

#### 4 成果(どうだったか結果と評価)

Metacognitive skills の面では、学生達が自分の学び方を積極的に管理する価値があること、そして、ピアラーニングを通し学べる人が多いことに気付き始めた。(エビデンス④)

グループワークの相手の英語のレベルがより高いだと学生達が自発的に見習おうとする。そういう成功経験を積み重ね、英語を話すことに自信をもつようになったと証言している。(エビデンス⑤)

後期の最終回授業には履修者全員に IELTS 又は英検準一級の過去問を使い、口述試験を受けさせ。ほとんどの学生がよく出来たと思う。(エビデンス⑥)

#### 5 今後の目標(これからどうするか)

学生達の学習者オートノミーを育てるために計画的な self-study を促し続ける。勉強をあきらめない、挑戦し続けたいという姿勢が育つために様々な勉強方法のメリットとデメリットを話し合う場を設ける。モチベーションと自信の向上のために、民間の英語の口述試験の受験を促していく。そして、就職活動に入る前に、英語を使う仕事にも興味を持たせ又は膨らませ、どう実現すればいいかについて考えさせていく。

#### 6 エビデンスとなるもの(資料の種類などの名称)

- ① 授業中のインタラクションとコメント (非公開)
- ② 授業中のインタラクション (非公開)
- ③ 授業中のインタラクションと MS Teams での投稿 (非公開)
- ④ 授業中の学生からのコメント (非公開)
- ⑤ 授業中の学生からのコメントと授業評価の自由コメント (非公開)
- ⑥ 期末試験結果 (非公開)